

最 終 試 験 の 結 果 の 要 旨

神奈川歯科大学大学院歯学研究科 口腔科学講座 平田 貴久 に
対する最終試験は、主査 荒川 浩久 教授、副査 児玉 利朗 教授、
副査 向井 義晴 教授により、研究に採用した統計手法の妥当性、研究の特長や新規
性の確認、将来にわたる研究成果の応用などに関する論文内容、ならびに
関連事項につき口頭試問をもって行われた。

その結果、合格と認めた。

主 査 荒川 浩久

副 査 児玉 利朗

副 査 向井 義晴

論文審査要旨

重度歯周炎患者のサポータータイプペリオドンタル
セラピー期間における歯の喪失の予測因子

神奈川歯科大学大学院歯学研究科

口腔科学講座 平田 貴久

(指導: 三辺 正人 教授)

主査 荒川 浩久 教授

副査 児玉 利朗 教授

副査 向井 義晴 教授

論文審査要旨

本論文は、予後判定困難な重度歯周炎患者における SPT 期間の歯周病による歯の喪失の予測因子としての PRA 評価と TRP 評価の有用性、ならびに個々のリスク因子の応用可能性について、多施設共同の後ろ向きコホート研究によって検討したものである。そして、わが国の重度歯周炎患者において、PRA 評価と TRP 評価それぞれが SPT 期間中の歯周病による歯の喪失の予測因子として有用であること、また、TRP 評価に SPT 開始時の喪失歯数を考慮することで予測精度の向が期待できることを示唆した。

本論文の背景には、ヨーロッパで研究が進んでいる PRA 評価が日本人に適応できるのか、多施設での汎用性はどうかという申請者の疑問があった。さらに、わが国の先行研究で TRP 評価の有用性は示されているものの、アウトカムや追跡期間の設定に課題が残っている点を解明したいという独創的な目的があり、今後の重度歯周炎患者の歯の喪失を防止に貢献する意義ある研究であると認めた。

設定した目的を解明するために採用した調査方法ならびに統計手法は適切であり、神奈川歯科大学研究倫理審査委員会の承認（第 388 番）のもとに、後ろ向きコホート調査に適合した倫理的配慮も十分であった。また多施設の調査であるため、治療方針や SPT の手法の不統一が予想されたため、日本歯周病学会認定歯周病専門医と認定歯科衛生士が常勤する施設に限定したり、SPT 期間が 1 年未満の対象者は除外したりするなど、ノイズが少なくなる工夫がなされていた。

その結果、SPT 開始時までの 8 本以上の喪失歯保有群、PRA 評価の中等度リスク群と高リスク群、TRP 評価の治療反応性不良群が歯の喪失と有意な関連のあることを認めた。さらに、PRA 評価とその構成因子である SPT 開始時の喪失歯数と TRP 評価の同時投入モデルを検討した結果、PRA 評価と TRP 評価の同時投入モデルでは、TRP 評価が有意ではなくなったが、SPT 開始時の喪失歯数と TRP 評価の同時投入モデルでは、いずれの変数も有意であった。2 つの変数を組合せて検討したところ、TRP 評価が治療反応性良好群でなおかつ SPT 開始時までの喪失歯数が 8 本未満だった者を基準として、治療反応性不良群で喪失歯数が 8 本以上だった者の HR (95%CI) は 20.17 (3.45-118.12) と有意であった。

以上の結果は分析順に示されており、表の示し方も必要最小限で理解しやすいものとなっていた。考察については希薄であるとの審査委員会の意見をもとに適切に修正され、意義ある論文となった。重度歯周炎患者の歯周病による歯の喪失を防ぐ対策としては、高リスク群患者の SPT 期間中の来院回数を増やすことであるとまとめられた。

本審査委員会は、論文内容および関連事項に関して、口頭試問を行ったところ十分な回答が得られることを確認した。さらに、今後の重度歯周炎患者の歯の喪失を防止するために意義ある成果を収めたものとの結論に至った。そこで、本審査委員会は申請者が博士（歯学）の学位に十分値するものと認めた。